



<1> 死者2,000人、感染者9万人…医師不足との国連声明受け渡航を決意

編集部から

ハイチでのコレラ発生を受け、長崎大学熱帯医学研究所教授の山本太郎氏は、特定非営利活動法人アムダ (AMDA) とともに、同地での治療と予防活動に従事するため、10日間の予定で同地に赴くこととした。ところが、ハイチ各地で起きた暴動の余波を受け、同氏はニューヨークに足止めを食らい、3日遅れでハイチ入りした。“崩れゆく国”での同氏の奮闘ぶりを現地から緊急レポートしてもらう。

第1報(12月12日※1:ドミニカ共和国・サントドミンゴ)

ハイチへ乗り入れるすべてのフライトが運行を中止

2010年10月中旬、ハイチ※2でコレラ発生が報告された。以降、コレラ流行はハイチ全土に拡大し、国連発表によれば12月3日時点で、死者2,071人、累積患者数は9万人を超えた(ハイチ保健省の発表によると、死者1,882人、感染者数8万4,391人)。ハイチ全土で50カ所を超えるコレラ専門の治療センターが設置されたが、終息の気配はない。周辺国への流行拡大が懸念されている。こうした状況を受け、潘基文(パン・ギブン)国連事務総長が国際社会へ向けて緊急声明を発表した。声明では、少なくとも400人以上の医師と2,000人以上の看護師が不足しているとされた。そうした動きを受け、私はハイチでのコレラ対策に参加することを決めた。

私にとっては、今年(2010年)1月の地震※3の後、国際緊急援助隊の一員として医療活動に参加して以来、約1年ぶりのハイチだ。以前、2003~2004年にかけて、この国に暮らし研究活動を行ったことがある。最後は半ば内戦に巻き込まれるかたちで、研究半ばでこの国を後にした(その時の様子は『ハイチのちのちの闘い』(山本太郎、昭和堂)に詳しい)。それから7年が過ぎた。個人的にはその時の思いもあった。

12月8日(日本時間)に成田を出発した。ニューヨーク経由で12月9日にはハイチへ入る予定であった。ところが、12月8日(ハイチ時間)、11月に行われた大統領・国会議員選挙の結果発表があり、それに不満を持つ者たちの暴動に、終わりのない耐乏生活に不満を募らせた市民が同調。暴動はポルトープランスをはじめハイチ各地に広がった。国連平和維持軍と市民が衝突し死者が出た。治安が急激に悪化したことにより、ハイチへ乗り入れるすべてのフライトは運行を中止した。

3日間、ニューヨークで足止めを食った。その間にもフライトの予約、運航中止の延長が繰り返された。ドミニカ共和国経由でハイチに入ることができる予定は明日12月13日。今ドミニカ共和国の首都サントドミンゴでこの記事を書いている。

ところが、12月8日(ハイチ時間)、11月に行われた大統領・国会議員選挙の結果発表があり、それに不満を持つ者たちの暴動に、終わりのない耐乏生活に不満を募らせた市民が同調。暴動はポルトープランスをはじめハイチ各地に広がった。国連平和維持軍と市民が衝突し死者が出た。治安が急激に悪化したことにより、ハイチへ乗り入れるすべてのフライトは運行を中止した。

3日間、ニューヨークで足止めを食った。その間にもフライトの予約、運航中止の延長が繰り返された。ドミニカ共和国経由でハイチに入ることができる予定は明日12月13日。今ドミニカ共和国の首都サントドミンゴでこの記事を書いている。

第2報(12月13日:ドミニカ共和国・サントドミンゴ)

ハイチ行きの飛行機に乗るために空港へ

ドミニカ共和国、現地時間午前4時。これから準備をして、ハイチ行きの飛行機に乗るために空港に向かう。外は真っ暗。昨夕は日本からの自衛隊の方に偶然空港で会った。私と同じように米国で足止めされていた隊員のハイチ移動への後方支援とのことだった。ハイチ支援は隣国であるドミニカ共和国に、後方支援要員がいてはじめて可能だと言える。それは、民間団体も自衛隊も変わらないようだ。

第3報(12月13日:ハイチへの空路)

20人ほどが乗れるプロペラ機は満員

空からでもわかるという国境※4を越えてドミニカ共和国から空路ハイチへ入った。20人ほどが乗れるプロペラ機は、ハイチ入りする米国人、フランス人、ハイチ人、韓国人と私で満員だった。再開されたばかりの飛行機のせいか、どこかみな高揚したようであった。機内からは乗客たちの大きな話し声が聞こえていた。



ハイチとの国境を越えようとするところ。プロペラ機から

第4報(12月13日:ポルトープランス)

地震後の1年前と比べると静かなハイチ入り

到着した首都ポルトープランスの空港は、今年1月に起こった地震のせいで、いまだ、主要部分が使えない状態となっていた。それでも、1年前よりは混乱は少ない。地震直後の空港は、各国からの援助物資を運んできた飛行機で混雑を極めていた。それからすれば、静かなハイチ入りであった。(続く)



首都の国際空港を警備する国連軍の兵士。数日前の暴動では、ハイチにコレラを持ち込んだのが国連軍の兵士だったという風評が流れ、市民が国連軍と衝突した

※1:現地時間、以下同

※2:カリブ海のエスパニョーラ島西部を占める共和国。面積2万8,000km²。人口1,000万人。一人当たりGDPは世界149位で、西半球の最貧国とも呼ばれる

※3:2010年1月22日に起きたマグニチュード7.0の大地震。死者は22万人、被災者は300万人と推定されている

※4:ハイチの森林破壊は深刻で、緑豊かな隣国との国境は上空から色で分かるという



<2> 患者が待つ病院へ、さっそく治療・予防活動に加わる

編集部から

ハイチでのコレラ発生を受け、長崎大学熱帯医学研究所教授の山本太郎氏は、特定非営利活動法人アマダ (AMDA) とともに、同地での治療と予防活動に従事するため、10日間の予定で同地に赴くこととした。ところが、ハイチ各地で起きた暴動の余波を受け、同氏はニューヨークに足止めを食らい、3日遅れでハイチ入りした。“崩れゆく国”での同氏の奮闘ぶりを現地から緊急レポートしてもらう。

【ハイチ緊急レポート<1>】から続く

第5報(12月14日*:フォンデネグロ)

首都から120km離れた地の病院に到着

暴動の後の首都ポルトープランスは平穏だった。数日前まで、デモ隊が行進し、タイヤが燃やされ、銃声が響いたといった道も静けさを取り戻していた。夕方、ポルトープランスから120kmほど南西に位置するフォンデネグロの病院に到着した。

日本からメールが届いていた。「次から次へと起こる災難。脅威に対しても復元度を高める、言うはやすし行なうは難しだとあらためて感じさせられます。混乱の中で、予防できる病気によって次々に命が失われていく。たくさんの命を救って下さい」



数日前、暴徒で埋まったという道も今は静かである

第6報(12月14日:フォンデネグロ)

コレラの予防は一に隔離なのに、患者の世話を家族が…



ベッドの上で点滴を受けるコレラ患者。横に座っているのは家族の1人

14日朝、病院に入る。コレラ治療ユニットはなく、病院内病棟に隔離部屋を設置し治療を実施している。コレラの予防は一に隔離、二に消毒、治療は何をおいても補液である。患者の世話を家族がしている状態は改善されなくてはならない第一の点。私の到着が遅れたために、治療活動と予防活動は既に始まっている。それに参加する。

第7報(12月14日:フォンデネグロ)

10~20Lにも達する下痢便を消毒し廃棄

汚物の取り扱い(はもう一つの問題。コレラは、大量の下痢便が出る。時に10~20Lに達する。そうした便を、消毒し廃棄する。それを汚染なく行うことが次の課題。塩素消毒をした後、それを廃棄する。まずは、適切な場所に捨てることから。



排泄物を捨てた後

第8報(12月15日:フォンデネグロ)

簡単な質問をクレオールに訳してもらう



クレオールに訳した質問

私が今いるフォンデネグロからは、メールを送るのも一仕事。ここからでは、テキストの送信で精一杯。それでさえ、4回試して1回成功といったところだ。雨が降り、風が吹くとシステムがダウンする(編集部注:写真はテキスト以上に送信が難しいようです)。

患者や医療スタッフとのコミュニケーションは難しい。ハイチでは普通、人々はクレオール言語を使う。クレオールは、アフリカ各地からハイチに連れてこられた彼らの祖先が作り出した言葉。「食欲はありますか」、「吐き気はありますか」、「あるとすれば、何回くらいですか」…簡単な質問をクレオールに訳してもらう。(続く)

*:現地時間、以下同



<3> 第7回世界的コレラ流行期のさなかに生きているのだ

編集部から

ハイチでのコレラ発生を受け、長崎大学熱帯医学研究所教授の山本太郎氏は、特定非営利活動法人アムダ (AMDA) とともに、同地での治療と予防活動に従事するため、10日間の予定で同地に赴くこととした。ところが、ハイチ各地で起きた暴動の余波を受け、同氏はニューヨークに足止めを食らい、3日遅れでハイチ入りした。“崩れゆく国”での同氏の奮闘ぶりを現地から緊急レポートしてもらう。

【ハイチ緊急レポート<2>】から続く

第9報(12月15日*:フォンデネグロ)

コレラの症状や予防法を伝える車が走る

大音響をかき立てながら、車が走る。そのものがステレオになったような車だ。米国が寄付し、ハイチのあちこちを回っているとのこと。コレラの症状や予防法を住民に伝えている。



車の側面、背面にスピーカーが見える

第10報(12月16日:フォンデネグロ)

ハイチでコレラが流行したのは今回が初めてだという



燃やされた車の残骸

金の1つになった。

日本にいると気付かないが、実は私たちは今、第7回世界的コレラ流行期のさなかに生きているのである。今回のコレラ流行はどこから来たのか。今のところはっきりしたことは分からない。ハイチでコレラが流行したのは今回が初めてだという。これまでハイチでコレラの流行はなかったというのである。それが今回流行した。

流行は、地震の後の国連平和維持部隊の増派に引き続いて起こった。この一致に、コレラを持ち込んだのは同部隊だという風評が流れた。それが、12月8日に起こった暴動の引き

第10報(12月16日:フォンデネグロ)

ハイチでコレラが流行したのは今回が初めてだという



燃やされた車の残骸

金の1つになった。

日本にいると気付かないが、実は私たちは今、第7回世界的コレラ流行期のさなかに生きているのである。今回のコレラ流行はどこから来たのか。今のところはっきりしたことは分からない。ハイチでコレラが流行したのは今回が初めてだという。これまでハイチでコレラの流行はなかったというのである。それが今回流行した。

流行は、地震の後の国連平和維持部隊の増派に引き続いて起こった。この一致に、コレラを持ち込んだのは同部隊だという風評が流れた。それが、12月8日に起こった暴動の引き

第11報(12月16日:フォンデネグロ)

毎日5人くらいが入院し、5人くらいが退院

風評といえば、ある村では、住民の1人が井戸にコレラ菌をまいたという噂が流れ、男が逮捕されたという。病気が流行するとうわさが流れ、罪のない被害が出る。そんな単純なことに気付かされた。

病院では、毎日、5人くらいのコレラ患者が入院して、5人くらいの患者が退院していく。ベッドは合計で20(ほど)。なんとかやりくりしている状態が続く。



コレラ患者の便。コメの研ぎ汁様便などと形容される

第12報(12月16日:フォンデネグロ)

夜は寒さに震える



今回宿泊したホテル。発電機で発電する電気は9時になると自動的に消えた

ハイチは暑いという印象がある。以前ハイチで暮らしたことのある私もそう思っていた。ところが今私がコレラ対策を行っているフォンデネグロは寒い。今が冬だということもあるが、夜など寒いくらいである。私が宿泊しているホテルでは、吹きさらしの窓から風が通り抜ける。シーツ1枚きりのベッドは、体を温めるには薄い。寒さに震えた。そこでコレラ対策をしている。少し不思議な気がした。(続く)

*:現地時間、以下同



<4> 老女がコレラで死んだ

編集部から

ハイチでのコレラ発生を受け、長崎大学熱帯医学研究所教授の山本太郎氏は、特定非営利活動法人アムダ (AMDA) とともに、同地での治療と予防活動に従事するため、10日間の予定で同地に赴くこととした。ところが、ハイチ各地で起きた暴動の余波を受け、同氏はニューヨークに足止めを食らい、3日遅れでハイチ入りした。“崩れゆく国”での同氏の奮闘ぶりを現地から緊急レポートしてもらう。

【ハイチ緊急レポート<3>】から続く

第13報(12月16日*: フォンデネグロ)

亡骸は遺体袋に詰められ遺体安置所へ

12月15日、老女がコレラで死んだ。皆が少し目を離したそのすきに。わたしが来て3日目、病院でもはじめての死亡者だった。亡骸は遺体袋に詰められ、中庭に面した遺体安置所へ運ばれた。遺体安置所のドアが開けられた。大きな音を立てた鍵の音が辺りを圧した。人々は息をひそめた。



遺体安置所。大きな音を立てたドアと鍵



ひつぎを扱う店。葬儀ビジネスはハイチで大きな産業となっている

第14報(12月16日: フォンデネグロ)

祭りの行進から「コレラ、コレラ」の叫び声

15日夜、街の目抜き通り—といっても、ホテルが1軒、キオスクが数軒あるだけの通り—で、祭りのパレードがあった。ブードゥー教の祭りらしい。人々は着飾り、大音響とともに踊り回る。「コレラ、コレラ」との叫び声が行進の中から聞こえると、横の男性が教えてくれた。



祭りの様子。人々は「コレラ、コレラ」と叫んでいた

第15報(12月18日: レオガン)

フォンデネグロでの活動を終える



2人の長い友人とレオガンで (左から須藤氏、著者、児玉氏)

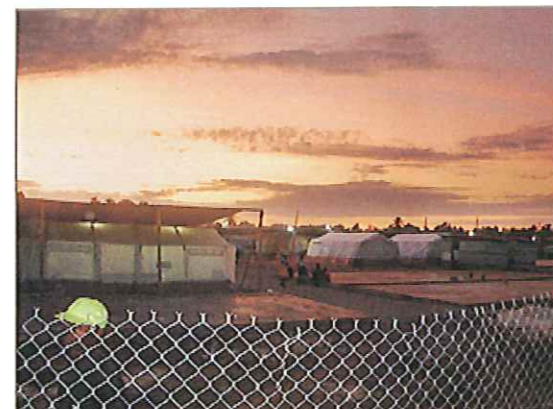
フォンデネグロでの診療と予防を終え、ポルトープランスへの帰途、レオガンという地域に立ち寄った。レオガンは、今年(2010年)1月ハイチ地震の後に緊急援助で入った地域であった。それ以上に、2人の貴重な友人が今暮らしている地域である。1人は今年83歳になる須藤先生、ハイチに30年以上暮らし、結核患者の治療に当たっている。もう1人は児玉君。今日本赤十字社からの派遣で、地震後の復興支援に従事している。大学院の後輩で、アフガン勤務の後ハイチへ来て半年だ。

久しぶりに会った2人は元気だった。少しばかりの日本の食べ物置いてきた。今回は時間の関係から会えないかもしれないと思っていたが、時間ができた。神様に感謝!

第16報(12月18日: ポルトープランスへの帰途)

コレラアウトブレイクには3つの治療施設が必要

コレラアウトブレイクには、コレラ治療センター(CTC)、コレラ治療ユニット(CTU)、経口補液ポスの3つの治療施設が必要とされている。CTCは重症患者を中心に24時間体制で患者の治療に当たる。それを核として、CTUが置かれ、CTUを核として経口補液ポスが展開される。ハイチ全土で約50のCTC、約200のCTUが設置されることが計画されている。私はCTUと経口補液ポスの中間のような施設で働いていた。(続)



国境なき医師団によって設置されたCTU、キャンプのよう

*: 現地時間、以下同



ハイチ緊急レポート

崩れゆく国でコレラと闘う

長崎大学熱帯医学研究所国際保健学分野教授
山本 太郎

Port-au-Prince
Fond Des Negres

<最終回>コレラ渦周辺国の平和にめまいを覚える

編集部から

ハイチでのコレラ発生を受け、長崎大学熱帯医学研究所教授の山本太郎氏は、特定非営利活動法人AMD (AMD)とともに、同地での治療と予防活動に従事するため、10日間の予定で同地に赴くこととした。ところが、ハイチ各地で起きた暴動の余波を受け、同氏はニューヨークに足止めを食らい、3日遅れでハイチ入りした。“崩れゆく国”で同氏の奮闘ぶりを現地から緊急レポートしてもらう。

【ハイチ緊急レポート<4>】から続く

第17報(12月18日*ポルトープランスへの帰途)

かつて勤務した研究所もコレラ治療センターを立ち上げ

ハイチ・カボジ肉腫・日和見感染症研究所(GHESKIO)という研究所兼診療施設がある。エイズと結核を中心に活動を続けている。7年前に私が働いていた研究所だ。年間約1万人のHIV検査をし、現在も感染者2,000人のエイズ治療を行っている。同時に多剤耐性結核を含めた結核対策を行っている研究所である。今年(2010年)1月の地震の後から感染症のエピデミックが心配だと所長のビルは話していた。

帰国の前日になんとか時間を見つめることができた。研究所を訪ねた。今回のコレラアウトブレイクを受け、この研究所もコレラ治療センター(CTC)を立ち上げていた。多くの仲間が迎えてくれた。地震後に訪問した時「地震で多くの仲間を失った。しかし、立ち止まるわけにはいかない」と言った所長のビルの言葉を思い出した。



GHESKIO。かつての同僚と一緒に

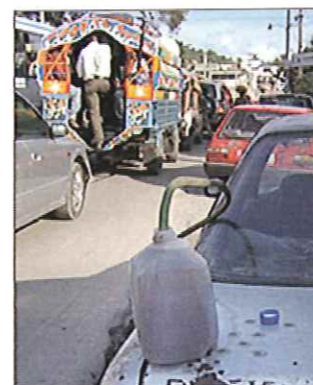


GHESKIOのコレラ治療センターを外から見ている筆者

第18報(12月18日:ポルトープランスへの帰途)

国民の生活はかなり苦しい

ガソリンがほしい。国連平和維持部隊がハイチに入り、経済は一部、復興バブルに沸いているところもあるが、物価の上昇もあり、国民の生活はかなり苦しいという。雇い上げた車で、さまざまな団体のコレラ対策を見て回った。その時のことだ。通常の給油所にはガソリンが少なく、長い車の列。闇で買ったガソリンは、4Lほどで10米ドルだった。国民1人当たりのGNPが400ドル、500ドルの国での話である。生活の苦しさの一端を見た気がした。



車の上に置かれた四角いボトルが闇で買ったガソリン。これで10米ドル



西半球で最大のハイチのスラム街「シテ・ソレイユ=太陽の町」。ごみが道に無造作に積み上げられている

第19報(12月18日:ポルトープランスへの帰途)

コレラの中でも街はクリスマス

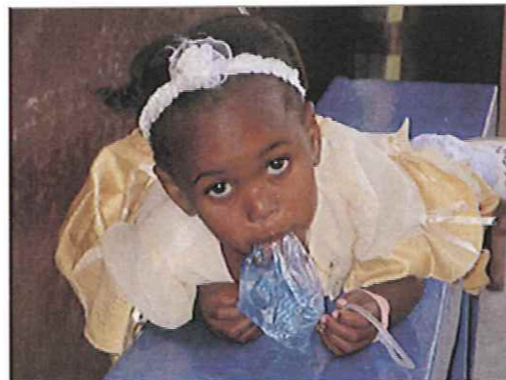
12月も中旬を迎え、コレラ流行の中でも街はクリスマス。フランス語では「ノエル」だ。ジョージマイケルの「ラストクリスマス」が聞こえてきた時には、7年前のクリスマスを思い出した。7年前は、独立200周年(2004年1月1日)前夜で政治的には非常に緊張した状態が続いていた。それでも、クリスマスは街を覆っていた。



クリスマスの飾りを商う道沿いの露店と、それを吟味する女性

第20報(12月18日:ニューヨーク)

ハイチを後にする、同じ島の東と西とは思えない大きな差



ベッドが満床のため、外で点滴を受けるハイチの少女。父親がくれた水を口にする

1週間のミッションを終え、ハイチを後にした。ドミニカ共和国、ニューヨーク経由で帰国する。約40時間の行程だ。不思議な制御しようのない感覚に包まれる。ハイチからドミニカ共和国まで1時間のフライト、そこには同じ島の東と西とは思えない大きな差がある。

子供たちがコレラで入院しているハイチから1時間、ドミニカ共和国に着いた。土曜日の朝だ。国内線用の空港(ハイチ-ドミニカ共和国便は国内線の空港を使うことが多い)から国際空港への移動の途中、道沿いの広場では、子供たちが野球に興じている。どこまでも平和な景色が広がる。

さらに、ドミニカ共和国から飛行機で3時間50分行けば、ニューヨークに着く。そこは、世界の経済と情報の中心地。摩天楼がそびえる巨大都市である。

不思議な居心地の悪さと感覚にめまいさえ覚えた。(終わり)



ドミニカ共和国の首都サントドミンゴ。土曜日の朝、野球に興じる子供たち

*:現地時間、以下同